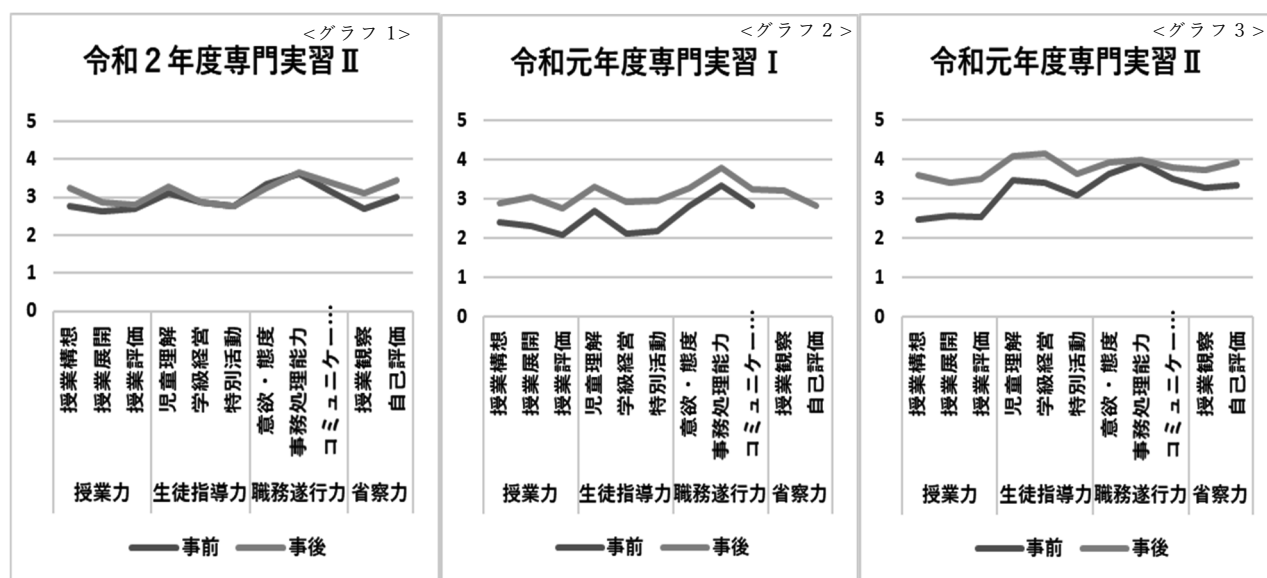




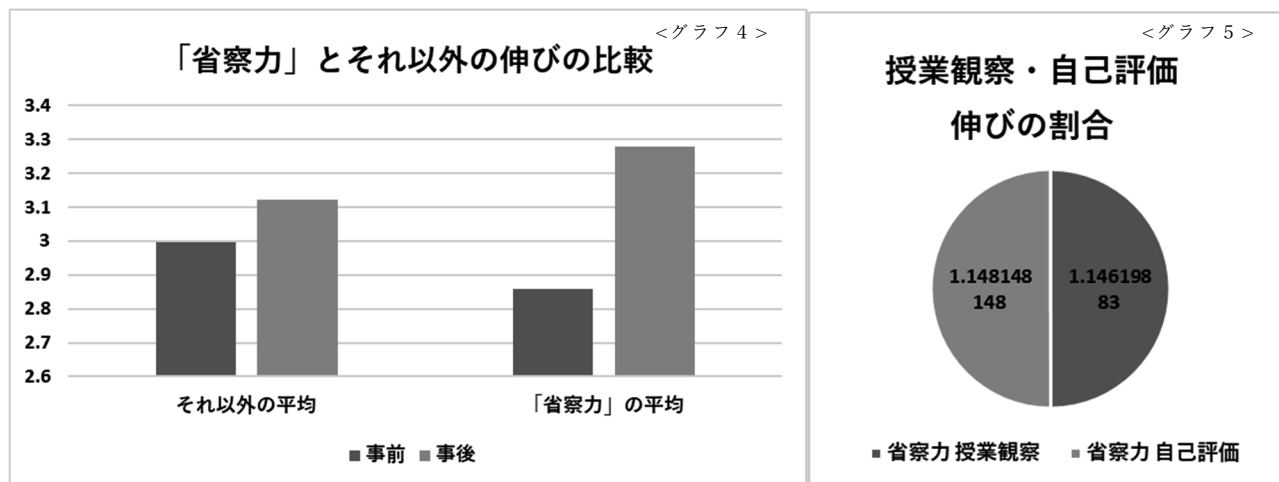
教職専門実習事前事後に自己評価を行っている。専門実習ⅠとⅡが比較できる4領域11項目で事前事後の変化を見比べてみる。対象は林ゼミ今年度8名、昨年度9名、評価ポイントは、5：大変よくできている～1：努力を要するである。自宅実習に切り替わった本年度M2〈グラフ1〉、昨年度M1〈グラフ2〉、昨年度M2〈グラフ3〉を比較した。

今年度の事後の自己評価の伸びは明らかに小さく、特に生徒指導力の3項目では変容が見られないが、一方、省察力（授業観察、自己評価）の2項目は他の項目より伸びが見られ、自己評価は、3.5と全体の中でも高い数値となっている。これらの要因は、自宅実習に拠るものなのかを、ゼミとして位置付けた合同省察会と実習日誌から検討していく。

合同省察会は、都合7回zoomで行い、M2院生の教師としてのアイデンティティ再構築をねらいとした。まず、新型コロナウイルス感染拡大の中、現状を分析するために日本赤十字社の「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～」の資料を基に自分が置かれている状況を見つめさせ、冷静に「気づく力」「聴く力」「自分を支える力」について考えさせた。そのことから2点課題が上がってきた。1点目は、子供たちの「教育格差」のさらなる拡大、2点目は「子供たちのストレスへの対応」についてであり、これらを協議し振り返りをして、まとめたコメントを再度メールで送付し、シェアリングを重ねた。その振り返りの繰り返しの繰り返しにより、ゼミメンバーが課題に対して向き合う機会を多くした。

臨時休校解除の方向も見え始めた第4回のゼミでは、学校再開後について協議した。M2が課題とした柱の一つは、学習の遅れへの対応である。限られた時間となり、学習内容が圧縮され、教師からの一方的な教授型の授業にならないようにするために教材研究が必要になるという視点である。もう一つは、GIGAスクール構想に基づくオンライン授業の模索である。学校現場では学校での授業ができないことを想定して、ホームページやテレビからの学びを発信している。今まで当然だと思っていた対面授業からハイブリッドな授業を目指すために、先ずこ

れまでに学んできた学びを総動員してオンライン模擬授業（4 教科）に取り組んだ。誰もが経験したことのない学習スタイルで、授業構想や授業展開が問われ、発問、板書、ワークシートを工夫し、グループに分かれての活動も取り入れた。子供役の学習者になると同時に「自分が指導者なら」という観察者の視点を意識し、振り返りシートや実習日誌にコメントを記入した。



〈グラフ 4〉〈グラフ 5〉は、M2 の事前事後の評価票による変化量と内容比較を示している。「省察力」はそれ以外の項目より伸びが見られ、「省察力」の内容項目である授業観察・自己評価は同割合であった。このように専門実習Ⅱの自己評価は、視点を明確にして授業を観察し、自己を振り返り、自分自身や喫緊の教育課題に向き合ったからこそその結果だと考える。

ではこのような専門実習Ⅱを M2 はどのように受け止めていたのかを実習日誌から見てみる。

実践的指導力向上に向けての課題として、現場経験の少なさがある。特に、授業面では実習以外にほとんど経験がなく、緊張してしまう事が多い。また、生徒指導などの面においては、積極性に欠けるところがあるのも問題である。そこで、今後の方策として、私は支援員などを通し、学校現場へと関わることにした。授業面では様々な教員の授業を観察し、自分でも取り入れていきたい。生徒指導などの面においては、児童と積極的にかかわり児童理解を深め、筋の通った指導ができるようにしたいと思う。（中略）大学での学びを生かしたり、模擬授業を行ったりなどして高めていきたい。また、放課後の学習指導なども受け持つ予定なので、反映できるようにと考える。

今回の自宅実習での M2 の姿から「自分と教育」「なぜ教師を目指すのか」という問いが再度生まれたと考える。このフィードバックは、教師としてのアイデンティティを問い、豊かな人間性と強靱な精神力を備えた教師を目指すことに繋がると考える。即ち、実践的指導力を身に付けるためには、教育の本質を常に自問し、多様な課題に向き合う必要がある。致し方なく教職専門実習は自宅実習に切り替えざるを得なかったが、M2 はその中で、このような理不尽な状況に対応し、自分なりに取り組んだ。教職専門実習では、自己の高い志と矜持をもって学び続ける教師になるために今回の学びを生かし、自分と向き合うことを重ね、意図的、計画的、協働的にリフレクションを効果的に位置づけたい。そして、自他を観察し、省察に焦点化することにより、さらなる実践的指導力向上に繋がる新たな教職専門実習を探っていきたい。